
砂倉居学園

猫々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂倉居学園

【Nコード】

N9182U

【作者名】

猫々

【あらすじ】

厳肅なムードが漂い、窓からは海の絶景が見られる…私立砂倉居学園。

日本でも五本の指に入るだろうといわれる砂倉居財閥の建てた学園である。

全寮制、私服登校で、幼学部、小学部、中学部、高学部の四つの『学部』から成り立っている。

この学園では、世間でいう『お金持ち』の子息達のための教育の場である、といえる。

九月、その高学部にひと組の双子が転入してきた。
かおるとみちる、そして関わる人々の学園生活。
『想巡庵』に記載されている『砂倉居学園』の転載となります。

1、9月2日/8:45から

厳肅なムードが漂い、窓からは海の絶景が見られる…私立砂倉居学園。

日本でも五本の指に入るだろうといわれる砂倉居財閥の建てた学園である。

ここは全寮制、私服登校。

幼学部、小学部、中学部、高学部の四つの『学部』から成り立っている。

この学園では、世間でいう『お金持ち』の子息達のための教育の場である、といえる。

「ここかな？」

くりくりとした瞳で愛嬌のある顔をしている。

瞳も髪も深いこげちゃ色で、軽くウェーブのかかった髪をかきあげた。格好は白いシャツにジーパンといういたってシンプルな格好だ。

シンプルな格好だからこそ、スラリとした長い足が際立つ。

だが…男？ いや、女だろうか？ 性別は、わからない。

「みちる、この辺で学校といえば、ここだけだろう？」

そう応じたのは、「みちる」と呼ばれた者とは対照的な、すつと切れ長の目と真っ直ぐな髪質で、それぞれ炭のように黒い髪と瞳の存在。

こちらは深緑色の面白いデザインのＴシャツに、中国を連想させそうなズボンをはいている。だが、この者も性別が判断できない。

「この辺というか…」

呟きつつ、黒髪が存在 かおるは、振り返った。

「正確には…」

どこまでも続く海原を見る。
潮風が二人の髪を揺らした。

「この『島』にはこの学園しかない」

砂倉居学園は…丁県から船にゆられて十分の『島』だった。

「ねえ、ちよつと見てみなよ！」

「きゃっ、転校生？」

「ちよつと、イイ感じじゃない？ あの男の子たち」

「えー。違うよー。女の子たちだよー」

「どっちにしても美人ねえ」

高等部の女生徒が窓辺に集まり、外にいる二人組みにそれぞれの評価を付ける。

「…きれいですわね…」

ぼつり、と声が聞こえた。

「か、夏鈴^{かりん}さん？」

夏鈴と呼ばれた少女はくすくすと笑う。

大きな瞳、少し上向きの鼻。髪にはピンク色のレースがひらひらと髪に巻き付いている。

そして彼女の最も特徴的なのは、その格好。 ベビーピンクの

ヒラヒラ、フリフリのワンピースを着ている。

ピンクハウスのドレスのようだ。

「…あの二人、欲しいですわ」

「えっ??????」

夏鈴の言葉にそう動じている少女のことを気付いているのかいなのか。夏鈴はそのまま、ぼそりと続けた。

「絶対に私のものにしてみせるわ…。とくに…」

うつとりと少年（と夏鈴は仮定している）を見つめる。

「あの人…黒髪の方…」

「転校生を紹介します」

めがねをかけた小太りの担任。にこにこにこにこに笑っている。

（なんであんなににこにこしているんだ？）

こげちゃの少女（と夏鈴は仮定した）　みちるは疑問に思い、軽く首を傾げる。

その様は小鳥のように愛らしい…。夏鈴はうつとりした。

（同じクラスなんて…！！　これは運命ですわね！　二人とも手にはいるなんて…！！！）

夏鈴はこんな時だけ神に感謝する。神様、二人を私にくださってありがとうございます…。と。

しかし神がいたら『夏鈴のものではない』と、お告げをしたほうがよいと思うが。

「麻生^{あそう}みちるさん、麻生^{あそう}かおるさん。お二人は兄弟です。みなさん、仲良くしてくださいね」

ふおおおおという笑いが似合いそうな担任のあだ名は『おたふく』だった。

それはさておき、担任からの紹介が一通り終わると二人は一言ずつ挨拶をする。

「麻生みちるですつ。みなさん、よろしくね！」

焦げ茶の髪にくりくりとした瞳のみちるは元気いっぱい＋ハートマークのつきそうな明るい声で言った。

しかし…。

「…麻生かおるです」

もう一方の転校生、かおるはそう言っただけだった。

夏鈴は「あそうみちる、あそうかおる」と何度か口にする。

（二人ともけっこう、普通の名前ですわね）

『この時間が終わったら早速…』と、夏鈴はまた笑みを浮かべた。端から見ればなかなか不気味な笑みである。

一時限目のホームルームが終わると、転校生達の周りに人だかりができた。

口々に、質問が飛び交う。

「どこからきたの？」

「京都から」

みちるが、にっこりと微笑みながら答える。

「どんな字で名前を書くの？」

「ないしょ」

先程から質問に答えているのは、にこにこと笑うみちるだけである。

かおるは、その質問の輪に入ろうともしない。

最初、かおるの周りに、あつた人だかりも、今では、みちるちるの方に移ってしまった。

（チャンスですわ）

夏鈴が、みちるの人だかりから離れ、悠然とかおるのもとへ移動する。

「はじめまして。私、わたくし笹本夏鈴ささもと かりんと申します。よろしくお願いしますわ」

にっこりと微笑む夏鈴に、かおるは、軽く顔を見て、

「麻生かおるです…」

そして、また窓の外を見る。

（なんですの、このかおるとやらは）

今まで、そんな扱いを受けた経験のない夏鈴は、ムツとした。

「どんな字で名前を書きますの？」

「…自分で考えてみてはいかがでしょうか？」

丁寧に、受け答えはされたが、…馬鹿にされている、と思った。

「かおる…」

みちるの呼びかけに、夏鈴はこの後『そんな言い方ないじゃないか！』とか、勝手に続く言葉を想像した。

『みちるちゃんなんていい子なんでしょう！！』と感動しつつみちるを見たが、次に続いた言葉は。

「次は古典で、前の学校と教科書が違うって。もらいに行こう」

そんな、予定（という名の予想、妄想）と全く違い、夏鈴はガクリとなる。

勝手に期待した夏鈴が悪いのだが『私の立場は？！』なんて思った。

みちるの言葉にかおるは、「ああ」と立ち上がり、みちるは、「ごめんね」と軽く頭を下げてから、夏鈴のもとを去った。

（…こんな屈辱は初めてですわ…）

しばらく後姿を見送っていた夏鈴だが、

（…まだ、彼が恋心というものを知らぬだけ…）

夏鈴はそう、解釈した。

ネバーギブアップの精神。

別名：勘違い。先走り解釈。妄想の暴走。

「恋は障害があるほど燃えるものですわ！！！！」

ぐつと握りこぶしを作りながら叫ぶ（？）夏鈴の姿は、なかなか見物であった。

「かおるう」

「…なんだ？ みちる、情けない声を出すな」

職員室から教室に戻る途中。廊下には窓がいくつもならび、さんと太陽のひざしが差し込んで、とても明るい。九月に入っただいども、まだまだ夏の陽気だ。

「もしかして、いまだに夏バテが治ってないのか？」

「ちっがーうつ！！！！」

力一杯に手を握り、みちるはかおるを睨み付ける。

「何のためにここに来たんだよつ。光兄さんを…」
…バンッ。

みちるの言葉に、かおるは教科書を床に落とした。

「か、かおる…?」

「言うなっ」

耳に手を当てながら、言う。…半ば、叫びに近い。

「まだ…まだ言わないでくれ…」

かおるはそう言った。語尾は、震えている。そして最後に「頼む…」と続けた。

それを聞いたみちるは細く息を吐き出した。

（まだ…だめか…）

そう思った。

（光兄さん、早く戻ってきてください）

みちるは、祈りにも似た思いを抱く。

かおるが…誰よりもかおるが貴方のことを待っています　とも。

みちるは頭を振って、かおるに小さく「ごめん」と謝罪する。

顔を上げたかおるに、続けた。

「ところでかおる、ボク思ったんだけどさあ。さっきの態度はちょっとただけなかったんじゃないかなあ…?」

そんな言葉を聞いて数度瞬くと、かおるは耳から手を離し、じっとみちるのを見つめた。しばらくして、落とした教科書を拾う。

二、三度、呼吸を繰り返した。

「…なにがだ?」

「だーかーらー」

ふーっと深いため息をつくみちる。

「さっきの、女の子に対する態度だよつ。前の学校にいたときはも

うちよつと……いや、もつと愛想が良かったじゃないか」

「学校には勉強に来ているのであって、愛想を売りに来てるんじゃない」

かおるはみちる同様、長い足をさつさと前に進めながら言う。

「……愛想を売りに来たわけじゃないにしろ、馬鹿にすることはないじゃないか」

「馬鹿にしてたのか？」

誰が？ とでも言いたげな瞳をこちらに投げかけてくるかおる。

天然ボケなのだろうか？

みちるがじつとかおる見つめていると「観念した」といった具合に教科書を持っていない方の手を軽く上げながら吹き出す。

「……そ、そんなにじつと見るなよ」

別に馬鹿にはしてないぞ？ と言いながら 微かに、笑った。

「くっ……分かった、分かった。愛想をふり撒かなくても、邪険にしない……ようにするよ。で、でも、本当にいるんだな。ああいう娘……ぶぶ」

「……かおる、地が出てるぞ」

若干ジト目になりつつ、低い声でみちるはぼやく。

その言葉を聞いた途端にかおるは笑うのをやめ、「……出ていたか？」と、先ほどまで笑っていた態度とは一転、そう、クールに切り替えた。

「おう、ばりばりに出ていたぞ」

「……人のこと言えんぞ、みちる」

淡々と言う姿は、先程の「質問の輪に入ろうとしない」かおるの姿だった。

「お前は女らしく過ごすのだろう？ 女がそんな言葉使いをするなよ」

「女らしく過ごすなんて言っていないぞ…言っていないよ」
そう言いながら伸びをする。「うーっ」と声が漏れる。

「ただ、性別の分からない謎の兄弟をやるのに協力しているだけだよ…優しい弟としてはね、か・お・る」
ハートマークが思いっきりつきそうな言い方である。

しばらくみちるを見ていたかおるだったが一度足元を見て、顔を上げた。

瞳はどこか、遠くを見つめる。

「男を演じていた方が 色々と気がまぎれて、いいんだ。…私としては」

忙しくて、気を使って…毎日深い眠りにつければ。

…余計な夢など見ずに、眠ることができれば。

「……………」

静かなかおるの言葉にみちるはじっと、その姿を見つめた。

しばらくして、気がつく。 二時限目の始まりのベル音が鳴っていることに。それから…

「…みちる」

「ん？」

呼びかけに、じっと見ていたみちるはハッとした。

ハッとしたみちるの様子に気付いているのか、いないのか か
おるはふと周りを見渡して、続けた。

「…ここは、どこだ？」

行きはよいよい、帰りは…とかいうやつである。

行きの時には先生がいた…もとい、連れていつてくれた。

帰りには先生がいない…当たり前といえば当たり前なことだが。

性別不明…に見せかけている…男女の双子、みちるとかおるは、仲良く方向音痴なのであった。

2、9月2日/10:00から

五条グループ…。

もとをたどれば平安時代から続く家系だとか。戦前一度没落したが今から三代ほど前に立て直した。由緒ある家柄と言えるだろう。しかしその五条家、肝心な世継ぎがない…とされている。

リリリリリリリリリリリリリリリリ

けたたましく授業の始まりのベル音が鳴り響く。

しかし今日来たばかりの転校生がやって来ない。

(まだ、いらっしやらないのかしら?)

夏鈴は後ろを何度も何度も振り返る。…まだ来ない。

2 時間目は古典の時間だ。

この古典の先生というのが小河美千代氏といって、美少年がとっても好きいうあたり、夏鈴と趣味が似ている。

似ているからこそなのかもしれないが、夏鈴はこの小河氏が苦手…はつきりと言ってしまふと嫌いだった。

いつも…夏鈴が目をつけた美少年の約5分の3程度は小河氏と趣味が被り、美少年争いで小河氏と対決(といっても影ながら火花を散らすだけだ)をし、現状、ほとんど負けている。

相手がどんな手を使っているか知らないが今回は負けたくない…負けられない、かおる(とみちる)を守って(?)みせると、妙に時間には厳しい小河氏を見たときに誓った。

しかし、先程から何度も何度も後ろに振り返っているせいか、
「笹本さん」

と、現代文に直すことを指名された。

その時に後ろからがらがらと音をたててかおる、みちるは教室に入室した。

「…遅くなりましたー…」

一度小河氏の顔を見てから深々と礼をしたみちる。

「すみません」

軽く頭を下げただけのかおる。

だが、小河氏の心は決まっていた。

（んっふっふっふっふっ。あの子、ゲットするわ）

小河氏の視線の先にはまぎれもなく、かおるが立っていた。

「まあ、席についてください」

はいっ！ と元気よくみちる、はい、と言ってさっさと席につく
かおる。

（んーっ、新しいタイプね。あのクールさがまた良いわー？）

「……………」

夏鈴は危機感を覚える。

（あの目はやばいですわ、狙われたのは、もう確実ですわー…っ！）

…夏鈴は軽くくらりときた。

「あっ、笹本さん、座って」

につこりと小河氏は微笑む。心の中では夏鈴のことなど忘れていたが、教師の本能が忘れていなかった…ということにしておこう。

「えーっと、麻生かおるさん、みちるさんですね？ わたしは小河美千代です」

よろしく、と小さく付け足す。

「えー、わたしの場合、遅刻をすると宿題をだしますので、そのつもりで。今日は、お話をしたいので、文系科研究室に18時頃に来てください」

「わかりました」

二人は同時に答える。まるで、ハーモニーのようだ、と夏鈴は思い、小河氏のかおるの澄んだ声にただただうっとり耳を傾けてい

た。

…
しばしの、間。

はっとしたように小河氏は生徒達の方を見つめる。

「えー。じゃあ、教科書42ページを開いて…」

ちやくちやくと時は過ぎていった。1時限50分。7時限ある。

朝食、昼食…もちろん夕食と…食事は食堂で食べるのだが、席はどこに座るかなどの決まりはないのかおる、みちるの側で食べようと席の争奪戦があつた…らしい。

結局、とあるテーブルの隅にみちる、その隣にかおる、かおるの隣に夏鈴…と座つた。

18時は夕食の1時間前で、文系科研究室は教室から食堂までの間にあるということに立ち寄つた。

2時間目に間に合わなかつた…という教訓を生かし、今度はきちんと(?)案内人をつけた。

こんこん

文系科研究室のドアを軽くノックする。…返答がない。

「失礼しまーす」

そろそろとドアを開けつつみちるが言う。

「…いないな」

誰もいない。まだ日が長いのでこの部屋が真っ赤に染まっていた。

「きれい…」

みちるが感動の声を漏らす。

「私は、好かん。血のようで…胸がムカムカする」
淡々とした声。

滲むのは、痛み。

『それは光兄さんを連想させるからか…？』
みちるは、その言葉をのみこんだ。

「それにしても本当にどうしたんだろうね…。それからどうしたらいいんだろう？」

話があるって言ったよねー？ とみちるは続ける。

「小河先生の机でも探してみるか？ 何かメモとかあるかもしれないし」

「ん、そだね」

みちるは北の方の机から見ていく。うーんないなあ…などと独り言を言いながら。

かおるは南の方の机から調べていく。すぐにみつかった。

「小河美千代：みちるあつたぞ」

軽く手招きをする。

「何かメモあるー？」

そう言いながら小走りのみちるがこけた。

「「ぷっ」」

「「えっ？」」

今、確にかおる以外の声がした。だから思わず「えっ？」とかおるとみちるがハモったのだ。

かおるは目をつり上げる。

「誰だっ」

みちるを守るようにみちるの前にでた。…だが、みちるもまたかおるを守るためにさっさと立ち上がり、かおるに背を会わせ、周りを見渡している。

…と、その時に入り口から声がきこえた。かおるが大きく振り返る。

「わ・た・し。小河よっ」

からからと入り口から入ってくる小河氏。顔がにやけている。

「そんな怖い顔しなくてもいいじゃない…ぷっ」

小河氏、思い出し笑いである。それを見てみちるはかーっと顔が赤くなる。

「せ、せんせい…」

「な、なあに？」

声が震えていたみちる。

（まさか笑いすぎたかしら？！ 泣いてる？！）

焦った小河氏に対し、顔を赤くしながらみちるが言った。

「そんなに笑わなくても良いと思う…」

（よかった…泣いてたわけじゃないのね。…では）

ほっとして内心息を吐き、小河氏はにっ的微笑む。

（作戦実行！！！）

小河氏はいつもこの技で短期に男の子達をゲットしてきた。

小河氏の技は短期集中…速攻で仕掛けるのが戦略であった。

かおるにもいつもの技を使おうとしている。いつもと少し違うの

は、その作戦に手紙を使うということだった。

「あ、遅くてごめんね」

小河氏は自分の隣の先生方の椅子をそれぞれ提供する。

「少し授業の説明をするわね…」

そう言っ授業の説明をする。

説明しながら日頃鍛えた（?!）タイミングでかおるに視線を投げかけたりした。

（ふふ…。完璧）

小河氏は内心ニヤリとしつつ、時計を見上げて言った。

「あら、もうこんな時間。長くてごめんなさいね…」

髪の毛を軽く後ろによせる。

「はい、これは問題集よ。今日は遅刻してきた罰として23ページ

から25ページまでやってくださいね？」

につこりと微笑みながら問題集を2人に手渡した。

「はい。わかりました」

「失礼しました」

二人はそれぞれに挨拶をしながら出て行く。

小河氏は「ごくろうさま」などいいながらにつこりと微笑んでこちらを見ていた。

しばらくはただただ食堂に向かって歩いていった二人だが、みちるが突然「ぷつ」と吹き出した。

「どうした？ みちる？」

いきなり吹き出して……と続ける。

「か、かおる気がついてなかったのか？」

「……？」

かおるはしばらくその言葉の意味を考えていたがしばらくして「何に？」と、本当に不思議そうな顔をしてみちるの瞳を覗き込む。

「そ、そっか……」

まだ笑っているのか、肩がふるえている。

「かおる、こういうこと対しては本当に鈍感だもんな」
心底楽しげに微笑む。今は完全な『男』の顔だった。

「……………」

さっぱりわからないかおるは、視線を天井へと向ける。
みちるはにつこりと微笑みながら、かおるの前に立つ。

「かおる、あの教師のお気に入りになつたらしいぞ」

ニヤニヤと笑うみちるにかおるは数度瞬いて「え？」と言った。
お気に入り、ということは　つまり。

「と、いうことは……」

かおるはほんの少し、笑った。

「私を男だと思ったってことだよな」

「まあ、そうと言えるだろうね」

みちるは腕を組んで頷いた。チラリと視線をかおるの手元 問題集へと向ける。 問

「あと、ボクの勘では…」

そしてひょいっと、かおるの問題集を取った。

「この問題集の間にも手紙かなんかが挟まってるんじゃないかな」
そう言いつつ、ぱらぱらと問題集をめくる。しばらくするとにやりと笑う。

：生まれたときから一緒にいるせいか、二人はよく似たような笑い方をした。

「あつたりー」

ひらりと手に取る。白いシンプルな封筒だ。小さくすずらんが描いてある。

「読んでもいい？」

「さすがにそこまでは…な？」

一応、私宛だろうから…。そう言つとさっそく開ける。

『麻生かおる君へ』

今夜お話ししたいことがあります。10時に私の部屋へ来てください。

小河美千代より

追伸 ほかの方にはれないように来てください。電気は消しておきます。

302号室です。』

「……」

かおるは軽く頭を左右する。

「そんなに激しいの？」

みちるが見ていい？ と、問うといいよと答えつつ手紙を渡す。

かおるはおでこに手を当てた。

「ふーん…。ねえ、かおる。これ行くの？」

「さて…どうしようか…」

言いながらかおるはこめかみをぼりぼりと搔く。

「…ねえ、かおるう」

そんな様子を見て、みちるが少し甘えるような声を出した。

（何か考えてるな…）

ふう…。かおるは軽くため息をついてからみちるの方を向いた。

「なんだ？ みちる…」

みちるはぱあっと笑顔になった。

これだけ見てれば可愛い弟なのになあ…。などと思つかおる。次の言葉はかなりの予想外だった。

「これ、ボク行ってみちゃだめかなあ？」

1、2、3。

たっぷり間が空く。

「み、みちるが行く?!」

少々どもるかおる。なんでお前が?! そう言ってみちるの襟首をしつかとつかみ、ぐらぐらと揺らした。

先ほどまでのクールさはどこへやら状態である。

みちるは「目が…。目が回るう」と、かおるに「やめてくれ」と助けを求めてみたが、まだゆらゆらと揺らす。

「せめて意見を言わせてくれー」

みちるの言葉を聞いたかおるは、

「…一応言ってみる」

そう、すわった目で言った。

「んー、あのさあ。この文面からしてかおるを狙ってる…すなわち襲っちゃう事考えてる文面でしょ？ だからボクがかおるの身を守ろうと…」

「…私だつて護身術を習つてたんだから、女の人ならぶつ飛ばせるぞ？」

女の人をぶつとばす。

言っていることが何気に過激で危険だ。

夏鈴を相手に、あれほど冷めた態度を取っていたのと同じ人物とは思えない。

ぐちぐちぐちとかおるはみちるに文句をつける。

そのときみちるは両手をグーにした手を、口に当て泣きそうな目（いつもより潤んでいる）でおるを見つめ、言った。

「かおる！！ どうしてボクの手を必要としてくれないの？！ ボクが信用出来ない？！」

そう言つたみちるに、かおるは一言。

「出来ない！」

きつぱりはつきりと言つた…。

ここは日本。決して南極ではない。しかし今流れている空気は南極を思わせる。

「前科ありなのはどいつだ？ ん？」

続いた言葉に、みちるはかおるの口をガバリと押さえ込んだ。

「と、とりあえずご飯食べに行こう！！ で、部屋に行つてからまた続きを話そうよ」

ね？ とみちるは言い、かおるをずるずると食堂に引っ張つていった。

3、9月2日／過去を振り返る

みちるは、かなり女好きである…。（かおる談）

「す、好きです、みちる先輩!!」

顔を真っ赤にしながら思いをぶつける少女。中学2年のバッジをつけている。

「…へ？」

これを聞いたみちるは驚いた。

なぜならここは通学中の（正確に言うと下校中の）電車の中だったからだ。

「あれ、君…バスケット部のマネージャーの…」

みちるの双子の姉、かおるはバスケット部だ。それで、顔を知っていた。

「佐々木ささき曖菜あいなです。と、突然ですみませんー」

言いながら少女…曖菜はますます顔が赤くなる。みちるの記憶だとこんな大胆なことをするような娘ではなかった気がしたが…。

「嬉しいんだけど…ごめん、僕…」

みちるはそこで言葉を区切った。

曖菜は瞬いて、くしゅつと顔を崩す。

曖菜はひとつ、大きく息を吐き出す。

「す、好きな方がいてもいいんです」

それは、想定した答えだったらしかった。

「え？」

そんな曖菜の答えが、みちるにとっては予定外の言葉だった。

「明日、引越すんです。それで」

あなたへの想いを伝えたかったんです…。

そう続けると唇を噛んで、顔を緊張させた。

「我が儘だって、分かってます。でも…。今日これから少しだけつき合っていただけませんか？」

そう言って、曖菜は下を向いた。

みちるは数度瞬いて、それからにつこりと笑った。

「いいよ」

…

駅ビルを散策して、お茶をして。

とても簡単な　けれど曖菜にとっては夢のような　デートをした。

「もうそろそろ帰ろうか？」

みちるの言葉に曖菜はひとつ、息を吐き出した。

「はい…。本当にありがとございました」

夢の終わり。　夢のような時間の、終わり。

美しい夕日が山の合間をすり抜けてゆく…。

「曖菜ちゃん」

呼ばれて、曖菜はみちるへと振り返った。

みちるの顔が、夕日と同じ色をしていた。

そんな瞬間…。

かおるは部活が終わると欲しい本を買いに町中にでた。
山間に夕日が沈んでいく。

（今日も1日終わった）

かおるはそう思った。

美しい夕日と、赤く染まる空をぼんやりと見上げていたかおるだったが、『本も買ったし今日は帰ろう』と振り返って　その、瞬間。

ロマンチックな気分が吹っ飛んだ。
キスをしているカップル…。

かおるの視力は左右ともに1.5。

(みちると曖菜ちゃん?!)

…その後みちるはかおるに張り手をくらった。

『可愛い後輩になにをするーっ!!』…と。

しかし、曖菜は『特別』な思い出が出来て、満足だったらしい。

「まさか…みちる？ 忘れた、なんて言わないよな…?」

食事も終わり、2人は寮に行った。201号室だ。

かおるはみちるの首を今にも絞めそうな勢いでみちるを睨み付けている。

「あ、あれはあ、女の子の方から『思い出をくださいキスしてください』ってきたんだよー」

(…って、解釈しただけだけど)

みちるは心の中で付け加えた。

曖菜は『一日付き合ってくれ』とは言ったが一言も、そんなキスしてくださ_{こと}いは言_{こと}ってない。

「女の子に対して無理矢理になんてやらないし…ボク、好きな子に嫌われたくないし…」

「本当だな?」

じーっとみちるの目を見るかおる。

「うん。小河先生には…ちゃんとお断りして、かおるにちよつかい出_{こと}すな、みたいなこと言_{こと}つとくからさ」

みちるは一呼吸いれてからもう一言付け足す。

「…と。光兄さん以外の人に」

ビクリッ。一気にかおるの瞳の力が、緩む。

「かおるを触れさせない」

今度はみちるがかおるを見つめる番だ。

ベッドに座るかおる。こめかみを軽く押さえている。

「大丈夫。悪さなんてしないよ」

…多分。心の中だけでみちるは続けた。

臨機応変、って言葉があるじゃない？ と。

「ん…。分かった…。じゃあ頼むわ…」

かおるの言葉に『まーかせて？』と言ってブイサインをする。

みちるに彼女をとられた みちるのせいで彼女にふられた

男、両手以上。

そして一日の恋のお相手もまた、両手以上…。

かおるは詳しくはわかっていないが…かおるが知っている以上に、

みちるはかなりの女好き 遊び人である。

小河美千代氏危ない！！ …かもしれない。

4、9月2日/もうすぐ10:00

「ほんじゃあ、オヤスミ。よい夢を」

「寝られるわけないだろう？ お前が帰ってくるまで待ってる。さつさとかた、つけてこい」

みちるは何とも言えぬ表情をし、その後につこりと笑った。

「…じゃあ早く帰るよう、努力する」

「て、出すなよ？」

に「つこりと微笑むかおる。」

（あら、ばれてる？）

「はい」

みちるは胸の辺りに手を上げて、言った。

（努力します）

…心の中だけでそう言う、みちるはそーっとドアを開け、小走りで302号室に向かった。

しかし。みちるに早速アクシデントが発生した。

小河氏の部屋に向かう途中、見回りの警備員に遭遇してしまったのだ。

「どうしたのですか？」

顔は『ガキはとつと部屋に戻りやがれ』と書いてある。…言葉使いは丁寧だが。

みちるは国語が苦手だ。文章を作るのもかなりの時間がかかる。

（ど、どうしよう…）

「え、えつと…」

声が緊張でかすれる。何と言おう？

思考停止までの秒読み開始。5、4、3…

「あら、みちるさん！」

夜の廊下に少し高い声が響く。みちるには天使が見えた。だがその正体は…。

笹本夏鈴、その人である。

ピンクハウスの服ということは変わりなかったが、今は白い服だった。

ちなみに昼間は、青を基調にした服を着ていた。

「あ…、かりんちゃん…」

「もう、始まってますわよ」

夏鈴は言いながらみちるの手をとる。

その言葉に『何が？』なんて、みちるは思わなかった。この娘にまかせておけば大丈夫。なぜかみちるはそう思った。

「あ、警備員さん」

につこりと笑う夏鈴。

警備員さん…こと松本準次（32歳・独身）はその笑顔に天使の微笑を見た。

誰にも漏らしたことはないが、密かに夏鈴のファンだったりする松本氏であった。

「おつとめ、ご苦労さまです。夜の見回りなんて大変ですわね」

「い、いえ。これも自分の仕事なんで…」

夏鈴ちゃんが俺に声を！ 松本氏、幸せの絶頂中。

「あのー、それをお願いがあるんですの」

もじもじと夏鈴。

この娘、すごい！…みちるは感心してしまう。

素晴らしい演技。僕もこれくらいでなくては…！！！！

「この子、今日転校してきたばかりでして、その…。お茶会を開こうと思って。このこと、内緒にしていただけませんか？」

「は、はいー！」

間もない…というのはこういうことだろう。すぐに返事が返ってくる。

「ありがとうございます！」

先ほど以上の満面の笑みで夏鈴は笑った。

松本氏は「では、ごきげんよう」と去っていく夏鈴をしばらく呆然と見送っていた。

松本氏にごきげんよう、と言って去ってきた夏鈴。みちるの右腕をしっかりとつかんで歩いている。

（うふふふふふ。こんな夜に歩くななんて…。これから呼びに行こうと思っていたのに、手間がはぶけましたわ）

でも…。なぜいるのだろう？ 夏鈴はふと疑問に思い、首を傾げた。

「あの…」

みちるは夏鈴に声をかける。夏鈴は返事をせず、みちるを見つめた。

「その…。ありがとう。ごめんね、迷惑かけちゃって」

言葉に夏鈴は、ふつとみちるから顔をそらせ、前を見据えた。

その時の夏鈴の表情は…うつとりしていた。

（か、可愛いですわ…。それから…）

夏鈴、百面相である。

次はニヤリ、といった表現があいそうな表情で、笑った。

（これを弱味にまず、麻生みちるゲット！ ですわ。ふっふっふ。

初日からゲットできるなんて、やっぱり神が私にくださったのね！

！…！）

…笹本夏鈴、かなりの自己中思考である。

「あ、お入りになって」

夏鈴に部屋に入るように勧められ…しばらくみちるはためらったが、最終的には夏鈴の部屋に入室した。

そしてみちるは言葉を失う。

「…」

ぬいぐるみ、ぬいぐるみ、ぬいぐるみ!!!

くま、うさぎ、なんでもござれだ。

（すごい数…。そういえばかおるはぬいぐるみ、集めてなかったな…）

呆然としているみちるに「さ、お座りになって？」と言いつつ夏鈴はいつの間に用意したのか紅茶も一緒に手渡す。

「あ、どーもありがとー」

みちるは夏鈴から紅茶を受け取る。

ミルクティーだ。一口、口にする。

もとから大きいみちるの瞳が、更に大きく開いた。

「おいしい！こんなに美味しい紅茶飲んだの、ひさしぶりだよ」

みちるの反応にくすつと笑う夏鈴。

（やっぱり可愛い？ ですわ）

夏鈴も自分で入れた紅茶を飲み、ほっと一息ついて

「ところで、みちるちゃん」

興味津々といった顔でみちるに問いかける。

「なんでこんな遅くに廊下を歩いていますの？」

浴室もトイレも各部屋についているのではつきり言って夜に部屋から出る理由がない。

「そ、それは…」

みちるは別に小河氏の部屋に行くことを忘れていたわけではないが…。それを言ってしまうていいのだろうか？

（げ、時間もそろそろやばい）

10時5分前。

ばらしてしまおうか？　そういう考えがみちるの頭の中によぎる。
(うーん…。どうしたものか…)

「？　さつきから時計を気にしているようですけど何かありますの？」

「げっ」

みちるは慌てて口を塞ぐ。

(こ、声だしちまった…)

どーしよー。みちるの顔が青くなる。

「…私に言ってみませんか？」

え。言ってみるって言われても…。

10時まで後3分！！

(　　言ってしまったえ！！)

みちるは腹を決めた。言ってしまったえば案外さつさと解放してくれるかもしれない。

みちるはにやりといった感じで微笑む。

夏鈴はこの笑顔にドキツとした。

(なにドキドキしてますの？　相手は女の子ですのにーっ)

夏鈴は顔が少し上気する。

「実は…」

この部屋には2人しかいないのだが何となくみちるは夏鈴の耳元でボソボソという。

10時まで後2分！

「なんですってーっ！っ！っ！…！！」

「わ、しーっ、しーっ！」

(こ、小河美千代め…)

みちるの声は耳に届かぬまま、夏鈴は怒りに拳を握った。

(やっぱり私のかおるさんに手を出そうと考えていたのですわねっ
っ！…！　許せないっ！　ですわっ！…！

夏鈴の脳内では、かおるは夏鈴のものになっている。

速急に訂正すべきだ。

…それはさておき。

くるりと振り返り、夏鈴はかなり座った目でジロリとみちるを見た。

「夏、鈴…ちゃん？」

恐る恐る、みちるは夏鈴の名を呼んだ。

「そんなお誘いっ」

…夏鈴から怒りの炎が見える　なんていうイメージ。

みちるはこっそり後退りしてしまう。

「うけなくて結構っ、ですわっ！！」

夏鈴のこの時の格好は　両手を腰に当てていた。

…なんという格好だろうか。

（仁王立ち…というか、何というか…）

みちるの今の心境ははつきり言って「ひーっ」だった。

みちるは思い出す。

笹本夏鈴。

笹本憲司郎弁護士の一人娘。

確かみちるの『見合い写真』の中にもいた気がした。みちるは人の顔と名前を覚えるのは得意だ。かなりの自信があるが…。

（この娘は見合い写真を見なかったのかな？　ま、覚えててもらってても困るけど）

ふと、時計を見上げる。

…10時3分。

約束の時間に遅れたこと、夏鈴の様子　から、みちるは今夜に小河美千代氏の部屋に行くことは諦めた。

今は…

（この娘をどうするか、だよな）

今のところみちるをぐちをこぼす対象としてみているようでは

らくは部屋に戻れそうにない。

みちるはぺろりと唇をなめた。

そんな姿にも色気を感じる夏鈴。

（私…あ、危ない趣味があるのかしら…）

と、密かに悩んでいた。たりした。

「ところで、みちるちゃん」

（なくってよ、そんな趣味っ）

夏鈴は自分で自分の思考を吹っ飛ばす。

顔をふるふると左右しながらみちるに提案する。

「あなた、ご自分の兄弟を守りたいとは思わなくて？」

おーっほっほっほっほ。そういう声が聞こえてきそうである。

目が「私に従いなさいっ」と言っているのだ。

みちるは、瞬いた。

瞬きながら、思った。

（…うーん、面白そう…）

みちるはみちるなりに考えた。考えて、出した答えは…。

「うんっ。守りたい」

夏鈴がどのようにかおるを守るか　と、『面白そう』という観点で、彼女に従うことを決める。

好奇心（？）に負けたみちるであった。

「ならば」

につこり。夏鈴は笑う。

（私の思惑通りですわ。これでみちるちゃんは私のもの？）

「私の言うことを聞いてくださいますわよね？」

これで1人…。とりまきが増えましたわ？

（この調子でかおるさんもゲット！　ですわ！！！！）

「クシュッ!」

かおるは寒気を感じてくしゃみをした。
時計を見る。

「遅い!」

かおるはひとり、ぼやいた。

時刻は10:30。

宣言どおり『さつさとかたをつける』ならば　いい加減、みち
るが帰ってきてもいいと思うのだが。

「寝ようかな?」

さつきから独り言連発のかおるである。

(寝れば夢を見るかもしれない)

もう一人の自分の声。

「やっぱ、待ってよ」

かおるはがばりと起き上がり、一気に立ち上がる。

「部屋の掃除でもするか」

こうしてかおるの夜中の掃除が始まった。

ちゅんちゅちゅん

何の鳥の声だろう?　私は…。ああ、砂倉居学園に転校してきたん
だっけ?

かおるの頭はひどくぼーっとして『考える』という活動をなかな
かしない。

(ひとかげ?)

向こうから誰か来る。背が高い。

ココハドコダロウ。

声なき声が問いかける。…かおる自身は気づいていない。
その人は近づいてくる。

日本人にして薄い色の髪。肌は日によく親しんだのか、小麦色だ。

かおるはその人を知っている。歓喜のあまり声が震え、視界がすすむ。

「か……り……」

かおるの髪は腰までとどき、その髪を風にもてあそばせながら一気に走る。

「光！」

その人は大きく腕を広げてくれた。……いつものように声が聞きたい。その笑顔だけでは5感を満喫できない。自分呼んでほしい。「かおる」と、呼んでほしい。視覚だけでは、足りない。

かおるはもう一度声を振り絞って叫ぶ。声がうまく出ない。

「光っ」

抱きついた……抱きつけた気がした。

そこにかおるの涙は『歓喜』から『悲しみ』へと、変わる。……自分で分かった。

風に揺れる花々。

深く、澄んだ川の流れ。

すべて止まった気がした。……そう、時の流れまでも。

「いかないで」

かおるはその人にそう、叫んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9182u/>

砂倉居学園

2011年11月20日03時22分発行